Chapter 32 : **恋の幸運＆レックウザ三度目の敗北 Part 2**

探偵サーナイトは、優雅な困惑の表情でライブニュースを見つめていた。サイコオーラが微かに揺らぎ、ティーカップを持つ手が一瞬止まった。彼女は二度瞬きをする。画面には、花嫁戦闘装備を身につけたキョジオーンと、愛情の山、リボン付きの法的書類、自作のハーレム花束の下敷きになっているバンギラスの姿が映っていた。

「……何なのよ、この多次元世界って……」  
彼女は完璧な姿勢でティーカップを置き、ため息をついたあと、また持ち上げて静かに一口すすった。

隣のソファに座る夫、ルカリオは腕を組みながらも、画面から目を離せずにいた。  
「……まあ、アイツ金はあるし、なんというか……安定してる？よくわかんねぇな。」

「ルカリオ、あいつ元は盗賊だったのよ。」

「今じゃ夫だよ……十回くらい。」

ステーションの広間の向こう側では、いつも通りスーツの上だけ着てシャツなしのマッシブーン将軍が顔を覗かせ、画面を一瞥するとニヤリと笑った。  
「おいおいマジかよ……幸運な野郎だな！岩塊に祝福を！」

ルカリオがマグカップを掲げる。  
「岩塊に乾杯。」

サーナイトはただ首を振り、再びお茶をすすった。  
「結婚してから、この世界がどんどん意味不明になっていくわ。」

「だな。」ルカリオは間髪入れずに返した。  
「でもうちは、結婚写真は一枚だけだろ？」

奇妙な結婚劇が世間に浸透し始めた矢先、放送が突如バグり、ノイズと共に新たな映像へと切り替わる。ひずんだデジタルのオーバーレイ、バチバチという音、そしてバリヤードの不気味な笑顔が、画面いっぱいに不自然に広がった。

「レディー＆ジェントルモン……愛のゲームの時間だ！」  
彼は高笑いしながら、ボロボロで花嫁衣装を着せられたキョジオーンを引きずって現れる。彼女は今や、プレミアムガチャボール型のガラスカプセルに閉じ込められていた。

その背後にはレックウザが立っていた。体にはデジタルコードと操り糸が絡みつき、瞳は空虚に輝き、完全に洗脳されている。

カメラがパンすると、バンギラスが映る。スーツの上着を脱がされ、デジタルのコロシアム──無慈悲な確率で回転するスロットマシンに囲まれた闘技場に立たされていた。  
「一万分の一の確率だよォ〜」と、バリヤードがあざ笑う。「お前の花嫁、賭けてみるかい？」

バンギラスは一瞬だけ無言で立ち尽くした。だがすぐに拳を握りしめ、首を鳴らし、迷うことなく咆哮して突進した。全力の突撃でスロットマシン群を粉砕し、爆音とともにコインの雨が弾け飛ぶ。ガラスのカプセルが砕け、レックウザは悲鳴を上げる間もなく、流星拳で真っ二つに裂かれて三度目の撃墜。

血飛沫がデジタル空間に弧を描く中、キョジオーンは落下の途中で抱き上げられた。花嫁衣装のまま、バンギラスの腕の中に収まり、彼は炎の中を歩いていく。まるで運命そのもののように、彼女を花嫁抱っこしたまま──。

ステーションに戻ると、サーナイトはお茶をこぼし、胸を押さえた。  
「いまの……本気でロマンチックだったわ……」

ルカリオの顎が落ちた。  
「ロマンチック？アイツまた神を真っ二つにしたぞ！？」

マッシブーンは横でポップコーンをかじりながら一言。  
「アイツ、歩くアニメ最終回だな。敬意を表するぜ。」

──

その頃、速報は世界中のスマホやスクリーンに広がっていた。  
エーフィは自室の図書館でラベンダーティーをすすりながら、静かに微笑んだ。  
「よかったわね。彼、やっと居場所を見つけたのね。」

後ろからそれを見ていたブラッキーが、満足げにうなった。  
「少なくとも、ガチャの害悪はまた潰れたな。」